

## “ A ” に見るもうひとつのストーリー

Mukherjeeの *The Holder of the World* 試論

小池理恵\*

### Another Meaning of “A”

A Reading of Mukherjee’s *The Holder of the World*

KOIKE Rie\*

#### Abstract

In recent years a stimulating subject for analysis has been the writing on immigrants by members of these migrations. There is now a vast assortment of writing about immigrants for us to consider, including many pieces written by those who themselves are immigrants. There are some fundamental questions to be explored: What is immigration? What is a homeland? Who is the rightful owner of a nation and how can we define national identity? What is the narrative of the United States as an immigrant nation? Do the narratives on immigrants by immigrant writers add some force to the literature of a multicultural nation? In the United States, there is an immigrant writer of Indian origin who has endeavored to answer those questions.

The United States of America is a country of cultural hybrids who bring together dissimilar literary traditions, genres, and modes. Understanding this helps us to connect the scattered dots of seen and unseen, heard and unheard reality, to make the lines that form the plane that is the United States. Immigrant writers play a significant role in uniting the dots and making the lines.

Keeping these issues in mind, in my reading of a text from what is known as the South Asian immigrant, an idea - showing Americans rewritten America - will be subjected to close study. This paper looks at a novel by Bharati Mukherjee, an immigrant from India, *The Holder of the World* (1993). In the novel, the heroines are re-incarnated and re-collect historical actuality in the process of making their own worlds. In Mukherjee’s words, “her intention” is disturbing what came before and “her mission” is exploring new worlds (“Holders of the Word” Sec.1)

In an interview right after she published *The Holder of the World*, Mukherjee explained her fascination with writing, attacking the thoughts expressed in George Steiner’s “Europeanization of America,” “I’m interested in showing Americans an America they haven’t seen before. The phrase that I have used in an essay is ‘making the familiar exotic, and the exotic familiar.’ I can show you Philadelphia in ways you haven’t seen before because I am a writer with a unique sense of looking at things” (“An Interview with

---

\* 富士常葉大学流通経済学部講師

## “ A ” に見るもうひとつのストーリー

Bharati Mukherjee,” *Mosaic* 7 ) She, claiming her right to be an American of Indian origin and refusing to be classified as an Indian-American, attempts to intrude into the history of the American establishment and to involve herself in the myth of the American origin. In another interview, when speaking about *The Holder of the World*, she insisted that “this is not a book about India, but about the making of America and American national mythology” ( “ Holders of the Word” Sect. 96 )

In order to find an alternative meaning embedded in the fragments of the personal and public history disturbed by Mukherjee, my study uses a trans-cultural perspective that reaches beyond the constitutive assumptions of a single specialization, and focuses on the position of unfamiliar cultural and historical “truth.”

アメリカ合衆国は移民の流入とともに多様な文学の伝統、ジャンルおよび形式がもたらされ、民族的のみならず文化的ハイブリッドの国であることは今更言うまでもない。この背景を再認識することは散在した歴史の点を接続し線となし、更にはアメリカという面を再形成するのに役立つ。以前から視野に入れられてきたあるいは語り継がれてきた以外の歴史、つまり視界から洩れ落ちたあるいは隠蔽された歴史、語られなかった歴史的現実を使用することにより、新たなアメリカを形成する線を引くという重要な役割を移民作家が担っている。

インドに生まれたバーラティ・ムカジイ ( Bharati Mukherjee ) は、アメリカ人作家としてこれまでに4小説、*Jasmine*、*The Holder of the World*、*Leave It to Me*、*Desirable Daughters*を出版している。現在は*Desirable Daughters*の続編として*The Tree Bride*を執筆中とのことである<sup>1)</sup>。1993年に出版された*The Holder of the World*は、ムカジイが最も時間を費やし歴史を収集した労作である<sup>2)</sup>。それはアメリカの代表的作家であるナサニエル・ホーソン ( Nathaniel Hawthorne ) の代表作『緋文字』( *The Scarlet Letter* ) の書き換え、または歴史的再生の試み<sup>3)</sup>と評されている<sup>3)</sup>。

17世紀ニューイングランド生まれの女性が、イギリスから、さらにインドへ渡り、当時ムガル帝国の皇帝と対立していたヒンズーの皇太子の妻妾になり、一子をもうける。その後セーレムへ戻り、その子をBlack Pearl と呼び、自らをWhite Pearlと称し、縫い物で生計をたて、糸に自分の人生を紡ぎ、模様を織り込みつつ語った。その物語を聞いていたのが、ホーソンの曾祖父であったという展開である。この17世紀ニューイングランドの女性がたどった人生を20世紀の古美術鑑定士である女性が、当時の美術品、特に細密画や刺繍によって再構築していくという構成をとっている。この作品においてMukherjeeは、インドとアメリカの関係がはるか昔から存在していたことを強調し、さらに、自身のインド性を全面に出すことによりアメリカ文学界にユニークな位置を確立したと言えよう。 ( 石原16-17 )

それはまた、ホーソンの側から見ると、彼の影響力が世代や性別をも越えて多くの作家へ及ぼ

しているのだともいえよう<sup>4)</sup>。作品の技法の上でもホーソンとムカジイには共通点が見られる。そのことに関して阿野は「セイラムの『税関』を通して再生へ」という論考の中でホーソンのロマンスを支える「中間地帯」(a neutral territory)に注目し、次のように考察している。ホーソンの技法を特徴づける序文の「税関」で、作者が古文書と緋色の布を見つけたことに端を発しこの物語が作られたとされていることを例にとり、「本文自体の中で構築されているだけでなく、序文(the Actual)と本文(the Imaginary)の相関関係の中でも構築されている」(160)「中間地帯」として、架空の人物が実在の人物と接点を持ち、フィクションに現実感を付与していると論じている。ムカジイの*The Holder of the World*にも同様なことが言える。ホーソンの『緋文字』の裏話という形を取っているが、インドの歴史上の実在人物である皇帝を登場させたり、ピンチョンの先祖が実はこの主人公の女性の一人と関わっていたり、ホーソンの曾祖父がこの物語の聞き手であったりするのである。

しかし、ムカジイは単にホーソンの影響を受け、『緋文字』の現代版パロディを書いたというわけではない。彼女はこの作品で実験的な試みを行っている。それは、メインストリームと呼ばれるヨーロッパ系男性作家の視点で創作され、長期にわたり読み継がれてきたアメリカの代表作に描かれている歴史を、今まで隠れてあるいは隠されて不可視であった新たな側面、つまり少数派と呼ばれる者(ムカジイの場合はインド系であり、女性である)の視点からの歴史に置き換えるということである。しかし、これはあくまでインド系女性作家としてカテゴライズされることではなく、そうすることによって偏っていたアメリカという自ら望む祖国を自らの力で獲得するというテーマのための戦略である。

アメリカの「歴史を書く」という行為は一般的に、今この時代にアメリカを建国するプロセスと深く関わっているとと言える。そのプロセスは、事実や出来事を過去に遡り発見し収集することから始められる。そして、現存するアメリカにそれを当てはめてゆき、最終的に自らが生成したアメリカとして、読者に提示することになる。こうしたプロセスの中では、過去を再構築する者の持つ、歴史に対する残像とその表現方法が非常に重要になる。つまり同じ過去の事実を示されても解釈の些細な相違により、描かれる歴史が大きく変わることもありうるのだ。

ムカジイは“A Four-Hundred-Year-Old Woman”というエッセイの中で、「歴史を書く」ことをも含めた広い意味での「作品を書く」ことに関連して次のように述べている。

The agenda is simply stated, but in the long run revolutionary. Make the familiar exotic, the exotic familiar. ...

My duty is to give voice to continents, but also to redefine the nature of *American* and what makes an American. ( “A Four-Hundred-Year-Old Woman” 25-26 )

上記の引用から、ムカジイの創作の大きな目的は、「アメリカ人」を再定義しハイフネイトされていないアメリカ人読者に再確認させ、彼らがこれまで知らなかった、あるいは見ようとはしなかった別のアメリカを提示することであると言える。更に言えばそれは、インド系の読者のみに

向けられたというゲッター化を回避することにもなる。

こうしたムカジイと近い立場をとっているのが多文化主義の歴史家であるロナルド・タカキ (Ronald Takaki) であろう。彼は、マイノリティのアメリカでの経験を、その歴史的役割を強調することでアメリカの過去に組み込もうとした。そうすることによって、アメリカが単にヨーロッパ系移民つまりハイフネイトされていないアメリカ人に代表されるものではないことを示そうとしたのだ。そして、ムカジイの試みは、彼の立場を更に進めたものであるといえる。

本論では、ムカジイが歴史の書き換えを利用するにあたり、“A”を“Adultery”(姦通)として解釈したホーソンに対し“Act”(行動)(54)と解釈し、アメリカにおいて現在に生きる非ヨーロッパ系の移民、特にインドと関わりのある者たちを、アメリカ建国当初からの一員と同等に位置づけようと試みたのではないかと仮定のもと、インド版『緋文字』としての*The Holder of the World*を検証し、彼女の視点とこの作品の中心テーマを明らかにしたい。

*The Holder of the World*は、別々の時代に生きた主人公たちHannahとBeighの物語が、時間と場所を越え絡み合って構成されている。主人公たちは2人とも、それ以前に書かれた3小説、*The Tiger's Daughter* (1972)、*Wife* (1975)、*Jasmine* (1989)の主人公たちのように、インドからの移民としてアメリカに関わってゆくという設定にはなっていない。逆に、彼女たちはアメリカにいながら、インドに関わっていく。その上、時間の流れも逆行する。現代に生きる一人の主人公が過去へと遡り、過去に生きたもう一人の主人公に関連した歴史を収集してゆき、そのデータをコンピューターにインプットし仮想現実体験するという筋書きである。

歴史上の人物として登場するHannah Eastonは、Rebeccaを母に、Edwardを父として1670年にマサチューセッツに生まれる。生後間もなく父は蜂に刺されるという事故で亡くなる。母に関する記憶として鮮明に残っていることは、彼女が自分の目の前でインディアンの恋人とともに去ってゆく姿である。その後、一人残されたHannahは養子としてピューリタンのFitch夫妻に育てられるが、彼女は産みの母Rebeccaと似た人生を選択していくことになる。

Hannahは結婚を機にアメリカを離れ、イギリスでの生活を経てインド(ムガール帝国)へ渡り、インドの王の妻妾となり子供を身ごもる。物語はこの歴史上の主人公Hannahの人生を調査することになった彼女の子孫の一人であるBeigh Mastersによって語られる。結果としてBeighはアメリカの歴史のみならず、インドの歴史をも辿ることになる。そして、両国がどのように接点を持っていたのか、インドがどのようなかたちでアメリカ建国当初の歴史に関わったのか、という点を明らかにしていくことになる。

Hannahがアメリカを離れ、インドとの関わりを持つようになる要因は12歳にして、早くも芽生えた母譲りの未知なるものへのあこがれや欲望である。

On a field of light blue, Hannah created an “uttermost shore.”<sup>5)</sup> A twelve-year-old Puritan orphan who had never been out of Massachusetts imagined an ocean, palm trees,

thatched cottages, and black skinned men casting nets and colorfully garbed bare-breasted women mending them; native barks and, on the horizon, high-masted schooners. ... In the distance, through bright - green foliage, a ghostly white building - it could even be the Taj Mahal - is rising. ...

That little embroidery is the embodiment of desire. ( *The Holder of the World* 44 )

この引用で述べられている未知なるものへの欲望が、東インド会社に勤務するアイリッシュの Gabriel Legge との結婚を Hannah に決断させる大きな要因になっている。彼によって語られる未だ見ぬ土地に惹かれ、彼と共にイギリスへそしてインドへと渡ることになる。結婚した2人は間もなくイギリスへ移住、そこで Hannah は Gabriel の航海中一人残されることが多くなった。しばらくして、夫の訃報を受けとるが、その頃までには彼女は自立した女性として成長していた。そして、彼女を支えてくれる新しい男性が現れたと思うまもなく、突然亡くなったはずの夫が再び彼女の目の前に現れる。彼はインドへの旅立ちを告げ、2人は Fortune ( 運命 ) 号で出航する。

インドでは、Gabriel の東インド会社での同僚とその家族との交際が始まる。しかし、彼はある疑惑の渦中に置かれ会社を辞める。Gabriel が海賊として再び海に戻ると、彼女の唯一の話し相手は、現地人のメイドのみとなる。Hannah はそのメイドからインドの文化を吸収し、次第にインドでの生活に魅力を感じるようになる。

一方、インドには、“black bibi” と呼ばれる「現地妻」らしき女性たちが存在することも知るようになる。そして、それが実際 Hannah と深くかかわる存在となってゆく。夫 Gabriel は bibi と一緒にいるところを襲われ、自分の家に連れ帰る。その状況に耐え切れなくなった Hannah はメイドと共に暴動の最中、家から飛び出していく。そこで、ムガールの王 Jadav Singh に助けられ彼の庇護のもとで生活を送ることになる。2人は恋に落ち、彼女は Salem Bibi と呼ばれるようになる。やがて、至福の時は終焉を迎える。イスラムの皇帝 Aurangzeb との戦いの中、彼女は恋人である Jadav 王の命を助けるが、それを潔しとせず嫌う王とその母により Hannah は追放される。敵対する皇帝との間に立ち、戦乱を終わらせようとした Hannah であったが、結局、皇帝の手により王は殺される。敵である皇帝は彼女を手元に置き White Pearl と呼び、大切にする。

Hannah の存在はその名前の変化とともに大陸をまたいで現れる<sup>6)</sup>。Rebecca の娘としての Hannah Easton、ピューリタンの家族に養子として育てられた Hannah Fitch、Gabriel の妻としてイギリスそしてインドへ渡る Hannah Legge、インドの王の妻妾となった Salem Bibi、恋人である王を倒した皇帝の世話になった Precious-as-Pearl/White Pearl である。現世にあって、Hannah の歴史を調査をすることになった語り手 Beigh は次のように考える。

Her life is at the crossroads of many worlds. If Thomas Pynchon, perhaps one of the descendants of her failed suitor, had not already written V., I would call her a V., a woman who was everywhere, the encoder of a secret history. ( 60 )

“ A ” に見るもうひとつのストーリー

つまりHannahは、複数の世界が重なる場所に隠されてきた歴史の重要な担い手であると言える。

Wherever she stayed, I am convinced she would have changed history, for she was one of those extraordinary lives through which history runs a four-lane highway. ( 189 )

そして、どこに現れようとも彼女は歴史の方向を変える力を持っているとBeighは確信して読者に語っている。また、Hannahはピューリタン社会にのみ存在しただけでは、決して知りえなかったであろうことをインドに渡り初めて知ることになる。

With Gabriel she had clung to Salem's do's and don'ts. She had clung to Salem's rules, hoping they'd help make sense of her own evolution. With Jadav Singh, she'd finally accepted how inappropriate it was in India - how fatal - to cling, as white Towns tenaciously did, to Europe's rules. She was no longer the woman she'd been in Salem or London. ... Everything was in flux on the Coromandel coastline. The survivor is the one who improvises, not follows, the rules. ( 234 )

上記の引用にもあるように、インドではピューリタン社会に即した慣習が通用しないゆえに、固定したルールにしがみつくなのではなく、自ら流動的なルールを作ってゆく者が生き残ることができる。この流動性はまさに現代アメリカの特色を示す言葉としてしばしば使われている。しかしこの作品でムカジイは17世紀ムガル帝国時代の歴史の流動性に焦点を当てている。その上、Hannahは初めて、女性として妻の義務的役割を超えた世界の存在が可能であることを知る。

And yet it was here in India that she felt her own passionate nature for the first time, the first hint that a world beyond duty and patience and wifely service was possible, then desirable, then irresistible. ( 237 )

Hannahはこうしてインドで得た新しい知恵を持って戦いを逃れアメリカへ戻る。そして、産みの母Rebeccaを探し出し、Jadav王との間にもうけた子Black Pearlと共に暮らす。

Hannah/Pearl returned to Salem with the infant and immediately began the search for her mother. She found her in a workhouse for the mad and indigent in Providence Plantations, speaking some tribal gibberish and insisting on wearing her outmoded woolens with the shameful / boldly sewn in red to her sleeve. It meant "Indian lover," ...

The town gossips named them White Pearl and Black Pearl. ( 284 )

Hannahの帰国は当時のピューリタン社会にとって重要な意味を持つことになる。インド人の血を持ち帰るということは、異種混交に繋がるからだ。

この歴史上の物語を収集し編纂するのが、現代の主人公であるBeighであり、その手助けをするのが彼女の恋人、インド人でMITのコンピューター科学を専攻するVennである。Beighは、自分の仕事である古美術関連の顧客の依頼により、“Emperor’s Tear” と呼ばれる世界で最も完璧とされるダイヤモンドを探すことになる。調査の過程でこのダイヤモンドの在処が自分の先祖の一人Hannahと深く関係していることを知る。ダイヤモンドは、彼女の恋人であるJadav王を倒した皇帝“The Holder of the World”の象徴で、それを最後に見た者がHannahである。こうしてBeighが収集したHannahに関する資料をVennがコンピューターに入力し、バーチャル・リアリティの技術を駆使し、ダイヤモンドを隠したと想定される時と場所へBeighが実際に赴き、その場면을体験することになる。

この小説の最終章で、まさにこの実験が行われる。BeighはHannahのインド人召使い（HannahからHesterという名で呼ばれる）として、戦いの真っ只中にタイムトリップする。そして、その戦いの中でダイヤモンドの隠し場所を知ることになる。しかし、Beighは決してその隠し場所を確かめるつもりはない。自分の腹部の痛みとともにその確信を自分の胸にのみ留め置く。

ここで、2人のヒロインBeighとHannahの共通点を挙げてみる。2人はともにインドとの関わりがあり、インド人の恋人を持つ。Beighは歴史を調査するうちに、Hannahの考え方や、行動に共感するようになる。2人の行動力はそのもとを辿るとHannahの母Rebeccaから伝授された言葉にある。それは“A is for Act, my daughter!”... “B is for Boldness,” ... “C is for Character. D is for Dissent, E is for Ecstasy, F is for Forage ...” (54)と呪文のように耳に残り、Hannahの行動力となって現れることになる。ピューリタン社会にあって、こうした行動力を持ち合わせる者がいたからこそ、そして、全く異なる文化の男性（Rebeccaはアメリカン・インディアン、Hannahはインドの王）を受け入れその子孫を残したからこそ、多文化社会として現在のアメリカの自由が確立できたのだ。

“We are Americans to freedom born!” White Pearl and Black Pearl were heard to mutter, the latter even in school. (285)<sup>7)</sup>

ムカジイはHannahをアメリカ人の自由を旗揚げする先駆者として作品中に送り込み、その一人の女性の行動力（“Act”）が歴史を変えた可能性を提示したとも言える。

次に、ムカジイの着眼点がホーソンの『緋文字』のどの部分にあり、それをどのように自らの作品に利用したのかを検証する。実際、ムカジイは、あるオークションで白人女性が17世紀インドの装いをしている絵を目にすることからこの小説の題材を思いついていた。

“ A ” に見るもうひとつのストーリー

The obsession behind “The Holder of the World” appeared to [Mukherjee] in 1989 at a pre-auction viewing at Sotheby’s in New York - in the form of a 17<sup>th</sup> century Indian miniature, a woman in ornate Mogul court dress holding a lotus blossom. The woman was Caucasian and blond.

“I thought, ‘Who is this very confident-looking 17<sup>th</sup> century woman, who sailed in some clumsy wooden boat across dangerous seas and then stayed there?’” ... “She had transplanted herself in what must have been a traumatically different culture. How did she survive?” These questions prompted the novel.

( “Giving Up the Perfect Diamond” 7 )

彼女はこの作品の背後にあるこだわりを表現するためにホーソンの『緋文字』を利用することを思いついたのではないだろうか。そしてムカジイは特に『緋文字』の最後の場面、つまり、パール不在部分、その空白を利用し全く別の側からの歴史を構築したと考えられる。

And Hester Prynne had returned, and taken up her long-forsaken shame. But where was little Pearl! ... But, through the remainder of Hester’s life, there were indications that the recluse of the scarlet letter was the object of love and interest with some inhabitant of another land. Letters came, with armorial seals upon them, though of bearings unknown to English heraldry. In the cottage there were articles of comfort and luxury, such as Hester never cared to use, but which only wealth could have purchased, and affection have imagined for her. There were trifles, too, little ornaments, beautiful tokens of a continual remembrance, that must have been wrought by delicate fingers, at the impulse of a fond heart. And, once, Hester was seen embroidering a baby-garment, with such a lavish richness of golden fancy as would have raised a public tumult, had any infant, thus apparelled, been shown to our sobre-hued community. ( *The Scarlet Letter* 179 )

ホーソンは上記引用の個所で、「どこから来たのか」そして「どの国のものであるのか」、その由来を明確にしない部分を残している。つまりそれは、「緋文字」をつけた世捨て人ヘスターが、他国に住む人の愛情と関心を受ける的になっていることを示すものであり、イギリスの紋章にはない紋で封印した手紙、慰めを与えてくれ、彼女に対して愛情を抱く人にしか考えつかないような数々の贅沢品であった。また、優しい心から、華奢な手で作ったに違いない小さな装飾品、絶えず心にかけている証の美しい品々もあった。そして、ヘスターが赤ん坊の衣装に刺繍をしている姿が目撃されている。それは、こんなすばらしい衣裳を着た赤ん坊が地味な色合の社会に姿を現そうものなら、大騒ぎになりそうなくらい異国的なものだったに違いない。ムカジイはホーソンが特定せずにおいた未知なる部分である「他国」にムガール帝国を取り入れ、その歴史を自作に組み込んだのではないだろうか。そして、ホーソンの意図的な歴史の隠蔽についてムカジイは



次のように説明している。

We have the shipping and housing records, we have the letters and journals and the *Memoirs*, and of course we have *The Scarlet Letter*. Who can blame Nathaniel Hawthorne for shying away from the real story of the brave Salem mother and her illegitimate daughter? ( 284 )

*The Holder of the World*の中でムカジイは、まさにこの隠された歴史に、母国であるインドとアメリカの「関連性」というものを探り、そこからインド文化がアメリカ文化の一要素になりうる可能性、更にはインドがアメリカを変えうる可能性を提示している<sup>8)</sup>。作品中では以下の引用箇所に「関連性」に対する問題意識を提示している。

And that seminar set in motion a hunger for connectedness, a belief that with sufficient passion and intelligence we can deconstruct the barriers of time and geography. Maybe that led, circuitously, to Venn. And to the Salem Bibi and the tangled lines of India and New England. ( 119 )

そして、語り手であるBeighがなぜ、アメリカにいながらインドに関わってゆくことになるのかもこの「関連性」で説明されている。

There are no accidents. My Yale thesis on the Puritans did lead to graduate school, but it also took me here. My life with Venn Iyer, father of fractals and designer of inner space, is no accident. ( 19 )

Vaguely, then, I'm part of this story, the Salem Bibi is part of the tissue of my life. ( 21 )

アメリカの歴史はインドと深い関連があり、今まで取り上げてこられなかった歴史を新しい移民の手で世に送りだそうという意図が読み取れる。

過去と現在、男性と女性、メインストリームとマイノリティという視点の相違が、この小説を『緋文字』とどのように決定的に区別しているのかを示す箇所がこの作品のまさに最後の文である。

And so all of this had happened a century before the writer's birth, a century and a half before he wrote his morbid introspection into guilt and repression that many call our greatest work. Preach! Write! Act! He wrote against the fading of the light, the dying of the old program, the distant memory of a shameful, heroic time. Time, O Time! Time to

“ A ” に見るもうひとつのストーリー

tincture the lurid colors, time for the local understudies to learn their foreign lines, time only to touch and briefly bring alive the first letter of an alphabet of hope and of horror stretching out, and back to the uttermost shores. ( 285 )

この下線部の解釈こそが、視点の相違、解釈の相違そして歴史の相違なのである。つまり、“the first letter of an alphabet” を “A” とすると、それを “of hope” ( 希望として ) と “of horror” ( 恐れとして ) で解釈する歴史の捉え方をこの作品で紹介している。“A” を “of hope” つまり “A as Act” として作中に送り出されたのがムカジイのヒロインであり、“of horror” つまり “A as Adultery” がホーソンのヒロインであるといえる。“A” に限らずそれにつづくイニシャルの解釈にも同様なことがいえる。ムカジイはイニシャルを主人公 Hannah が母 Rebecca から受け継いだ行動力を示すものとして位置づけている。

“A is for Act, my daughter!”

... “B is for Boldness,” ... “C is for Character. D is for Dissent, E is for Ecstasy, F is for Forage ...”

And I, thought Hester, remembering the women who wore is emblazoned on their sleeves, is for Indian lover.

“I is for Independence,” said Hannah. ( 54 )

これに対して、ホーソンのイニシャルの捉え方はピューリタン社会の慣習で、それぞれ罪を示すために用いられた。例を挙げると、Blasphemy ( 神への冒瀆 ) Drunkenness ( 泥酔 ) Forgery ( 偽造 ) Incest ( 近親相姦 ) Theft ( 強盗 ) Viciousness ( 意地悪さ ) などである。

また、それぞれの作品の登場人物が象徴として身につけたイニシャルについても注目してみると、“A” と “I” というそれぞれの頭文字は、ホーソンがアメリカの “A” を利用したと仮定するとインド生まれのアメリカ人作家としてのムカジイは “I” を利用したとも言える。しかも Hannah の母 Rebecca はその文字を “Indian Lover” のイニシャルとして身につけたが、Hannah はそれを “Independence” のイニシャルとして捉え換えている。更にこれらのイニシャルは時を隔てて Hannah の人生を語る Beigh にも影響を及ぼし、彼女と交際のあった男性のイニシャルとなって現れている。

Like Rebecca, I have a lover.

Long ago, there was Andrew, ...Blake, ...Chase, ...Devon, ...Gavin and Giles, ... . ( 31-32 )

このように、同じイニシャルでもそこにこめられた意味の捉え方、解釈の相違が生じる。それは時代を、そしてそこに生きる人々をも反映している。その結果生み出されたこの作品では、現代移民作家の目を通して見たアメリカの歴史がインドと深く関わっていた。今までアメリカ人作

家が語ろうとしなかったアメリカの歴史をムカジイはこの作品で提示している。

アメリカの代表的作家ホーソンによって作られた歴史は、後にインド生まれの移民作家ムカジイによって別の視点から改変されることになる。ムカジイはインド系アメリカ人あるいはアジア系アメリカ人 (Indian-American, Asian-American) とハイフネイトされたアメリカ人になることを否定し、自らの起源をベンガルあるいはインドであるアメリカ人 (American of Bengali origin, American of Indian origin) と言い換えている。こうした彼女の主張が *The Holder of the World* にも反映されている。それは、亡命者としての立場とは異なり、インドは取り戻すべきユートピアではなく、あくまでもアメリカを自ら帰属する国としていかに獲得していくかという問いに対する歴史的解答なのである。

読者は、歴史の中でのアメリカとインドとの関わり、そしてアメリカの歴史に於けるインドの役割を考える機会をムカジイによって与えられる。ムカジイはHannahの人生を通し、17世紀ニューイングランドに生まれた女性が、流動的歴史の只中にあった当時のインドで、インド人あるいはインド文化を積極的に取り込むことがあり得るのだということを示している。3世紀の時を隔て、BeighがVennとともに暮らし同じプロジェクトに向かっているのも、歴史上の関連があったからだと言える。

この作品はハイフネイトされていないアメリカ人への同化の陰に隠されてきたインドとの歴史的関連が現在のアメリカ社会を形成し、アメリカ人をアメリカ人たらしめる要因になる可能性を、祖先がイギリスからの移民である読者に再認識させた。異文化の要素は今後更にアメリカ社会を流動的に変えてゆく可能性があり、自分たちもそのつながりの一端に位置している。自らの望む祖国を自らのペンの力で獲得するというムカジイの姿勢が彼女の作品をポジティブなものにし、彼女をアメリカ人作家として位置づけている。

## Notes

\*本論は、2001年1月、アジア系アメリカ文学会例会にて口頭発表した原稿に加筆訂正したものである。2003年6月、3度目の来日、名古屋においては初めてのBharati Mukherjee氏の講演後の質問に対して「自作の中で最も労作である」と答えた *The Holder of the World* についてこれを機に再読したものである。

1. 2003年6月19日、ムカジイの名古屋での講演後の質疑応答にて触れた内容 (Appendix参照)。
2. 同講演後の質疑応答での内容 (Appendix参照)。
3. 1998年1月の『英語青年』でアジア系アメリカ文学特集が組まれたが、石原はその中で特に「南アジア系北アメリカ文学」としてこの作品を取り上げ、「Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter* の書き換え」として紹介している。
4. 『英語青年』2000年6月号に於けるホーソンの『緋文字』特集では、「ホーソンは優れた作家を「捉えて離さず」、メルヴィル、ジェイムズ、フォークナー、オコナー、アブダイク、オースター、ビッグビーそしてムカジイの

## “ A ” に見るもうひとつのストーリー

現在に至るまで、様々な刺激を与え再生を続けている」(入子)とムカジイの名を挙げその影響力を示している。また『緋文字の断層』に収録された「20世紀のディムズデイル、ヘスター、パール - 3冊の『緋文字』語り直し小説について - 」では主要人物の名がそのままタイトルになっている現代小説チャールズ・ラーソン『アーサー・ディムズデイル』(1983)、クリストファー・ビグズビー『ヘスター』(1994)と『パール』(1995)が紹介されている(柴田)。

5. ムカジイは重要な場面で『緋文字』の表現を導入している。この下線部では『緋文字』の最後の一行の表現“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”( *The Scarlet Letter* p.180 )を利用している。
6. 主人公の名前の変化は前作 *Jasmine* にもみられる。Jyotiとしてインドに生まれ、初めてのアメリカでJazzyと呼ばれ、一人の男性にとってはJassyであり、別の男性にとってはJaneとなる。しかし彼女の本質はJasmineであり、それを見抜いていた2人の男性からそう呼ばれることがあった。一人は、インド人で彼女の最初の夫であり、もう一人はアメリカ人で最後に彼女を迎えにきた男性である。
7. この引用は「緋文字」に対する人々の考え方の変化を提示した次の箇所を思い起こさせる。  
... the scarlet letter ceased to be a stigma which attracted the world's scorn and bitterness, and became a type of something to be sorrowed over, and looked upon with awe, yet reverence too. ( *The Scarlet Letter* p.179 )
8. インドがアメリカを変えうる可能性は *Jasmine* にも見られたテーマである。主人公は、インドの村から初めてアメリカにやってきた時、アメリカ人となるべくマナーを教え込まれたが、結局新しい名前を与えられるごとに自分自身が変化するだけでなく、周囲をも巻き込んで変化させていった。それは彼女が“tornado”(182;183;190) のようだと形容されることでも強調されている。

## Works Cited

- Appiah, K. Anthony. "Giving Up the Perfect Diamond." *The New York Times Book Review*, 10 October 1993. 7.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. 1840. New York: Dover, 1994.
- Mukherjee, Bharati. *The Holder of the World*. New York: Fawcett Columbine, 1993.
- . *Jasmine*. New York: Fawcett Crest, 1989.
- . "A Four-Hundred-Year-Old Woman." *Critical Fictions*. Seattle: Bay Press, 1991. 24-28.
- Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore*. Boston: Little, Brown and Company, 1989.
- . *A Different Mirror*. Boston: Little, Brown and Company, 1993.
- 斉藤忠利編『非文字の断層』開文社出版、2001年。
- 石原敏子「南アジア系北アメリカ文学」『英語青年』1988年1月：16 - 18。
- 阿野文朗「セイラムの『税関』を通して再生へ」『英語青年』2000年6月：159 - 161。
- 入子文子「『緋文字』 - さまざまな再生と古典的<メランコリー>」『英語青年』2000年6月：154 - 158。

## Appendix

Talk by Mukherjee in Nagoya, 2003

Questions and Answers:

Transcribed by Rie Koike

Question: My name is Rie Koike. I have devoted many years to studying your writing in which I am greatly interested. So I am presently working on my PhD dissertation focusing on you and your works. I am particularly interested in your idea concerning hyphenated identity because this is something we Japanese don't have. My question is in your recent interview on the Powell website you say that you wrote *Desirable Daughters* as an Indo hyphen American writer accepting the hyphen you had never accepted before then. As a writer has your attitude towards the US changed or in general do you now accept being called not only an American writer but as an Indo, also Indo-American writer?

Bharati Mukherjee: Very interesting question. Let me for those of you who don't know my position on hyphenization from an essay called "A Four-Hundred-Year-Old Woman" - now you know my age, I've disclosed that - I had stated very assertively and I still believe in that statement - I'm an American writer, writing to expand the mainstream of American literature and I am not an Indian writer, I'm not a hyphenated writer, and my commitments, my obsessive subject matter is in the new world. And that was - then I elaborated it in various television and radio interviews-- and that was in order to fight the conscious and unconscious racism that is directed at non-European-American writers. No one says routinely John Updike is an Anglo-American writer but they will routinely say of Amy Tan "She's a Chinese-American writer" or they will say Bharati Mukherjee, Amy Tan, Jessica Hagedorn Maxine Hong Kingston are all Asian-American writers. And I once took on a very famous broadcaster saying 'What do you mean, Asian American? I love Amy Tan's work, I love Maxine's work, but they are second and third generation Christian Americans who are doing their very American number of roots search whereas I'm talking of characters who, like me, and the characters of Willa Cather are writing about immigrants coming in - in Willa Cather's, case Scandinavians into Nebraska - that I have more in common with a Willa Cather than I do with Amy Tan in terms of the experiences I'm trying to dramatize, the conflicts that I'm trying to dramatize. So it was in the context of that that I have

“ A ” に見るもうひとつのストーリー

and continue to assert ( sic ) that. Don't you forget that an American writer can look the way I do, speak American English with the accent that I do, wear the clothes that I do and still be legitimately American. And I have, until *Desirable Daughters*, my novels have been as easily about a 17<sup>th</sup> century colonial American woman up in Massachusetts, the daughter of Nathaniel Hawthorne's character Hester Prynne - Pearl Prynne in other words, a Vietnam vet as I mentioned who commits much violence, much mayhem, because he feels frustrated at the way white America is changing on him as I have felt writing from characters with backgrounds like mine. And so, I've always said, let us choose the labels that we want and that are appropriate for the work that is being discussed. I often used to get attacked because I wasn't necessarily writing about my incredibly elegant, incredibly affluent, incredibly feudal Calcutta that I'd left behind long ago and that I no longer remember or want to remember in nostalgic, romantic detail. But with *Desirable Daughters* I suddenly wanted to write actually the biography of my generation, my kind of women, and I thought if I can only write the biography of my two sisters and myself. We were all sent to school, graduate school or undergraduate school in the States and made very different choices. But I couldn't bring myself to write without the little stratagem of fiction. I couldn't write directly about my family. And once I'd created thirty six zero Tara as a narrator, suddenly the novel wrote itself. And it's about Indians making their way in very, very different ways in the new world and either repatriating themselves or saying I'm going to be a conquistador or I'm going to replicate Calcutta in New Jersey and it is like the entire world of that novel, *Desirable Daughters*, is full of immigrants, the man she falls in love with after she's ditched her very nice rich Bengali engineer husband is a Hungarian-American, ex-biker, ex-hippy, now Zen Buddhist, retrofitter, in her life of her whole life ( sic ) So everyone is somehow an immigrant. So Indo-American - I felt I can embrace it now at this moment for this book, the next book might be about something else and it won't be an appropriate term. I must be free to choose.

The following questions were asked in Japanese. I translated them into a summarized English.

Question: Do you think Canada has changed compared with the time when you lived there?

BM: I hope Canada has changed and if it has, it is because people like me put our bod-

ies on the line and our word out there in order to change the country and decry the fact that Canada during the period - fourteen years - that I lived there in 1966 through 1980 not only did not have a constitution, but assumed that it was a country of goodwill and an orderly country, and goodwill would trickle down from the top and reach all of us. I wrote an essay when I left Canada in 1980 - and I'll tell you why and how I left - called "An Invisible Woman" which has been anthologized in Canadian school texts now and is read in some schools. Parts of which were later introduced into the Multicultural Ministry's manifesto without, however, acknowledging the kind of work that people like me put in. And even now, I'm talking about 2002, I don't know about 2003, I haven't been in Canada in the last few months, if I go in with my white husband, if I cross the border with my white husband, I'm allowed in like that. If I go in by myself, I can expect to have secondary examination. And I don't know how to explain this other than racial profiling. Canada has done an extraordinary good job of public relations and so it is able to convince the world at large as well as its own people that hyphenization, or the mosaic model of multiculturalism, makes for greater tolerance than the stew model - think of meat stew - model of multiculturalism that we currently practice in the US. When I was living in Canada during those 14 years, the mosaic meant, in practice, that we were allowed budget for Saturday classes for heritage language classes for our children which is a very nice thing to do and annual food festivals and music carnival festivals - you Caribbeans do your steel drum thing, you Indians cook up your curry thing - but I wanted instead that budget to be redirected to the redressing of civil rights. I don't need to dance once a day for white Canadians. Instead when someone refuses to serve me in the bagel store or bread boutique in the very expensive fancy neighborhoods that I lived in, in cities like Toronto and Montreal I want to be able to sue and I want to get the guy who discriminates against me. In the 70s coming to a real bloody violent head in 1978, people like me, professionals, urbans, in cities like Vancouver, Edmonton, Calgary, Toronto, were all subjected, not just to institutional racism but to physical harassment. You would see car bumper stickers that said "Keep Canada green, kill a Paki," Paki being the equivalent of the slur word 'nigger' directed at South Asians. And there was no way that any of us could resort to a law to say 'what happens when goodwill breaks down or isn't there?' And the origin of this kind of public manifestation of racism began as a result of, in 1973, the then Prime Minister of Canada, Pierre Elliott Trudeau, very generously let in as legal immigrants 5000 Uganda Asians who had been driven out of Uganda by the dictator Idi Amin and

who held British passports, but the British government would not recognize their British passports and quickly introduced a law saying that if one grandparent had not been born on territorial UK, on British soil, forget your British passport, Hong Kong Chinese or Ugandan Asian, and so the Canadian government Liberal Party very kindly took these people in but it caused an extraordinary backlash. And you know I can't rule, I can't govern how people feel about races, but I want the government, when racism happens, when someone pushes me as people did against the subway and roughs me up, saying "Look at the kind of people we're letting in. Why don't you go back to Africa where you came from?" I want to be able to do something about it. I want the government to guarantee that that kind of discrimination will not go unpunished, uncensored, uncensored. And so, that's where suddenly it was obvious that the government didn't have the guts nor the legal apparatus, the constitutional apparatus, to fight for civil rights. Instead, what the government did was declare us, in policy papers, people like me who were useful contributing citizens of Canada at that time, labeled us 'the visible minority' which is why my famous essay is called "An invisible woman." We were the visible minority who were straining the - this is all government rhetoric - who were straining the absorptive capacity of Canada. Giving license to all the people who wanted to spit on us on Yonge Street on main streets in cities like Toronto and so hyphenization is all very well - I don't buy it period - is all very well as a model if all original cultures are given equal value. What we discovered instead is that there was a vertical valuation of cultures with west Europeans at the top, then south Europeans, then east Europeans and so on and at the very bottom were the South Asians because we were educated, we were urban professionals, we did not know our place. And Carlton University in Ottawa in the late 70s did an academic survey asking elementary school kids in a multiple choice questionnaire, First question, what would you most like to kick? A. a tree, B. a stone C. a dog D. a Paki? Again, using the term. And guess what was the most popular choice? And so it was that kind, you know, the government failed, one, to acknowledge that racism existed and then they whitewashed it with appeal to multiculturalism and, three, they incited, encouraged, that notion of Canada was meant to be a European country should remain a European country given license as I say to acts against us. If Canada is better now? That's not my experience of it necessarily but I hope for the sake of Canadians it's better. I mean I hate to dump on Canada. It's in my past and the advantage for me is that it politicized me, made me a much stronger writer, and I know what I want out of a society which is that guarantee of, of con-



stitutionally guaranteed civil rights. I buy the civil contract that the US offers. It's not about the constitution in its ideal was not set up about only this religious group or this racial ethnic group should be and like Jazz I want to use all man and pursuit of happiness as the phrases that I want to play on.

Question: Do you have any difficulty when you write as a male rather than a female; as an African-American rather than an American?

BM: What an interesting question and as I speak you know I'm going to think through the answer so I'm talking to you on my mental feet. First, let me clear up about the ability to write from different perspectives. As a schoolgirl in Calcutta in independent India I was at a tilt time ( sic ) in India's culture when the history books hadn't been rewritten for students in independent India and so the British history books that we had first started to read were written for British children in which the 'we,' 'we trashed the natives,' meant the British heirs were thinking that 'oh, goody for our ancestors' but we sitting in our Calcutta classrooms being taught by Irish nuns who had forgotten that India was independent had to reconstruct the 'we' as the British as well as the Indians so it was very complicated and instantaneous. And it helps me as a writer to get into different gender, races, whatever, and it also I think allows me something that my American women contemporaries, be they black, white, Asian, but second generation third generation Americans can't, like they refuse quite often to write from a male point of view or to write from another racist point of view for political reasons. I don't have that hang up I think because I was having to be so malleable as a child in the 50s independent India.

Can I write from any point of view? I don't know. My very first novel, *The Tiger's Daughter*, which like *Desirable Daughters* and *Jasmine* have been ( sic ) and *Middleman and Other Stories* have been the big sellers in my oeuvre has an African-American character who sort of comes out there and tells people what to do and I was thinking of one particular young man who had been in my freshman in my classes as a teaching assistant when I used to wear a sari, walk through the snow in my slippers, no stockings, no boots, because I didn't know about this in Iowa. So I had someone in my head, put him into a very imagined situation in Calcutta as it is going through its Maoist revolution. I can't say to myself at the start of a novel. "I need a Hispanic; I need a Chinese-American, it is not like a Coca Cola, not like constructing a Coca Cola commercial for television. And there are some

“ A ” に見るもうひとつのストーリー

characters that I can get inside of easily and some I can't so it just depends.

Question: Which of your novels do you like best?

BM: That's a toughie. I can't answer that one because you know you love all your children. The one I worked hardest at was *The Holder of the World*. I put in eleven years of research into every detail, every aspect is supported by history ( sic ) and then I dramatized it. And I realized while I was writing it that the character I had created seemed to have an actual prototype in the East Indian company documents and her name was Mary Gifford who went at age 14 to India, married five times because that was the only way of being a feminist, inherited these old dead guy's monies, then remarried, lost the money, married again and so on. So you know there are books I love for different reasons and sentence making- that ( *The Holder of the World* ) I think has the most exquisitely self consciously crafted sentences. What I am working on right now is called *The Tree Bride* and it's a continuation of *Desirable Daughters*. It takes two characters, one 19<sup>th</sup> century woman in the family who's married off to a tree at age five as often happened in my sub-caste of Bengali Brahmins in eastern Bengal and it follows up on the narrator Tara's future adventures. So that's what - I'm working in my hotel rooms, even now, on a laptop on this novel.

Question: How do you feel about using English in your novels?

BM: Okay. I'm not an NRI. NRI is Non Resident Indian. First, let me tell you a little story from my life. When I married my American Canadian husband or American husband of Canadian parentage, and we moved to Canada when we were looking for our first jobs, I was still an Indian citizen and when it looked as though my Indian passport would have to be renewed, I rushed to Ottawa to the Indian High Commission and the Indian High Commissioner, not the high commissioner, but the person in the high commission in charge of passport renewal said, "What makes you think that we are going to renew your passport? You have moved outside our community." They didn't make a fuss for renewing the passport of my older sister living in Detroit who was married to an Indian man. That was done but mine, because a woman had strayed, was seen as a threat. Now that I have become rather well known and they think, quite wrongly, that I am affluent, suddenly I am welcomed as a non resident Indian and they want me to invest and

buy property in parts of cities that are reserved for people, non resident Indians paying in hard currencies, sterling or dollars. So I don't think of myself as a non resident Indian. Language of colonizer - whether we like it or not, India was under British rule for 200 odd years, so some form of English became part of some strata of the Indian society and it has taken at least 30 years for an author with genius, with brashness, like a Salman Rushdie, writing his novel, *Midnight's Children*, to see how we can play with the colonizer's language until it is not the colonizer but it is our own. Making it into another language of the Indians and I think it has taken this long for not only Indians to feel that they do not have to mimic as I was trained to do as a very little girl by Irish nuns. We don't have to mimic the accent of a long vanished BBC England and we don't have to mimic the miniaturized polite fluency of a Jane Austen, but we can find our way of unfurling the language, making up the grammar as we go along. In my own case, landing in the United States, - because they were the ones offering scholarships and British universities were not in my generation, - landing in the United States suddenly meant I realized that I could make up the version of English that suited me and that I could distort the kind of grammatical rules that I had been so burdened by psychologically. And you know, you can't ever end with a preposition, formal Edwardian English. There was a time gap. If India had been colonized by the Germans or by Portugal, I would be less fluent in English and I don't know if I would have gone to Lisboa and written in Portuguese, I just don't know what the alternate rule would have been, but there's enough critical mass of Indians writing in English, whether they live inside India or live outside India, who write very many different forms of English and very many different subject matters treating India and diaspora. And the last thing is that the British, thanks to the Hanifukureshis second generation Briton, the Salman Rushdies, the Arundhati Roys, have now had to acknowledge that genius can be anywhere, and it is not simply the property, exclusive property, of Englishmen. ( laughs ) Too much passion.

Question: You have many facets - which is the strongest?

BM: I have many hat boxes. No I believe that identity is a fluid series and that you are what you are in any given context and I also believe that culture, like identity, is always changing. If you are a model railroad buff, you know how you have to fix the tracks and the trains constantly. I think that culture is always in process rather than a finished product, identity is in process rather than finished product,

“ A ” に見るもうひとつのストーリー

and writing, the work of imagination, is also a work of process. We are constantly making decisions and revisions as opposed to critics approaching *Jasmine* or *Holder of the World*, ( sic ) *Desirable Daughters* as a finished product and saying “Oh she comes from such and such a background, therefore, this is acceptable or not acceptable. She’s writing from a male point of view - this is acceptable or not acceptable.” So process rather than finished product. What hat would you like to give me? I’m ready.